（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　清水由美子

本論文は、主として延慶本など読み本系『平家物語』について、語り本はもとより記録・説話・伝承などの様々な資料との比較検討を通じて、その時代的な位置づけを行おうとするものである。まず冒頭の「はじめに」において、読み本系『平家物語』に着目しつつ、物語としての生成を解明するという本論文全体の問題意識を明らかにしたのち、本論を四章十三節に分かつ。

第一章「軍記物語と八幡信仰」は、軍記物語の始発『将門記』に都の論理と在地の論理が混在していることを指摘し（第一節）、頼朝の洲崎神社参拝記事・八幡託宣和歌の諸本比較を通して、四部本の成立圏を関東に見定め（第二節）、神功皇后三韓出兵譚の表現の類似を根拠に、延慶本『平家物語』と『八幡愚童訓』の近接を論証し（第三節）、源氏の氏神であり、皇室の宗廟神であり、阿弥陀如来を本地とするという習合神八幡大菩薩の多面的な性格が、物語形成の上で果たした役割をたどり、本章のまとめとする（第四節）。

第二章「読み本系平家物語の天皇と神と仏をめぐる説話」は、『平家物語』諸本の巻三に見られる「頼豪説話」を、この説話自体の変遷の中で検討し、頼豪の怨霊化が、新羅明神のイメージを託されつつ成されたことを析出する（第一節）。『源平闘諍録』に取り込まれた特異な醍醐天皇堕地獄説話を、同説話の史的展開をたどって、同書における編著者の意図――清盛の運命を予告する役割を果たす――を指摘する（第二節）。

第三章「読み本系平家物語の女性説話」は、母性を強調して描きだされる『平家物語』の時子像が、天皇と三種の神器を伴った入水を正当化する意図によるものだと解読し（第一節）、文覚出家由来譚において、後世には貞女としての袈裟像が前景化するけれども、読み本系では母を往生に導くことが主眼として描かれていると指摘し（第二節）、延慶本の梓弓説話の独自性を、同説話の系譜を詳細にたどることで、西大寺との親近性を指摘（第三節）した上で、読み本系の女性説話と西大寺流律宗寺院との関わりを指摘して、『平家物語』の成長に女性享受者の果たした役割を想定する（第四節）。

第四章「読み本系平家物語の和歌」は、読み本系『平家物語』の「やさし」の語が、和歌にまつわって用いられると指摘し（第一節）、真字本である四部合戦状本における挿入歌の特異な表記の経緯などを跡付け（第二節）、同じく真字本である『源平闘諍録』の和歌が、真字表記を試みながら断念されて現在の表記となったと指摘する（第三節）。

本論文は、近年とみに注目度の高い読み本系『平家物語』の実態を、豊富な傍証のもとに多角的に明らかにしている。読み本系諸本の文学的特質を解明するためには、より総合的な視点からの論の構築が求められるなど今後の課題も存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論に至った。